

俳句

どいなんごくじょう
土居南国城

下関市
(1898～1980)



【著作】

句集『土塊』（昭33・土居先生還暦記念句集刊行会）

【閲覧情報】

下関市立中央図書館

土居南国城は明治三十一年（一八九八）、愛媛県宇和島に生まれた。維新前に遡れば、三百諸侯の中でも最も開明的な大名として令名高い伊達宗城の城下である。賢君は洋学を重んじた。その先進的郷土色が南国城の血肉となっていく過程は、きわめて自然なものであったろう。少年時代、地元新聞の俳句欄に投句して俳人の萌芽を見せたことも、長じて京都帝国大学英文科に在籍したことも、別段肩肘張ったあぐくのなりゆきだったとは思えない。後年、室積徂春が旗揚げして俳誌『ゆく春』を創刊したとき、早速有力作家の一人として加わったのも当然であった。かつて少年南国城が投句を始めた新聞の俳句選者が徂春である。いわば旧知の師弟であった。

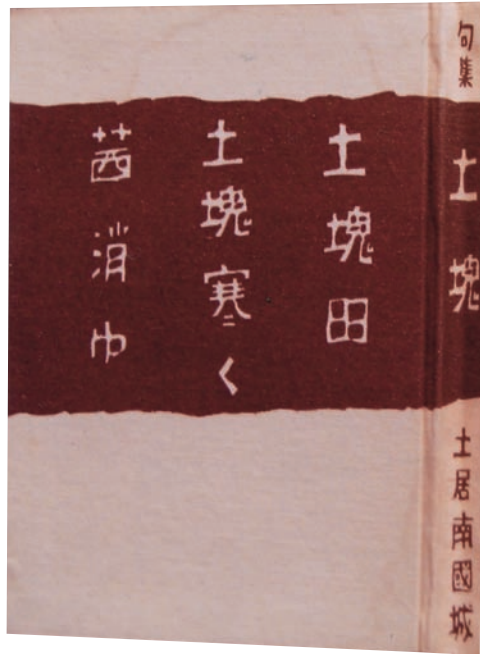
英語教師となった南国城の訳文が魅力に満ちていた事実は、後々まで教え子たちの語り草となった。訳文のよしあしは、ひとえに訳す人の人柄による。南国城の場合は作句修練の成果でもあった。その一端として、徂春が古今の句に対する時の峻烈正確な解釈力が、南国城の滋養となっていたであろう。徂春の切り口の見事さは知る人ぞ知る。俳壇に大家多しといえども、他の追隨を許さない迫力があつた。

宇和島のある伊予の国には、近代俳句の原点となった正岡子規の松山がある。輝かしい業績を残して夭折した子規を追惜する南国城が、俳人の生涯を貫いたのは宿命であろう。異郷山口県に移り住んで九半世紀、会う人はみな南国城を敬愛した。「俳句は報告でもなければ怒号でもない。耐えに耐え抜いた最後の一滴の泪でなければならぬ」と喝破した信条は、作品とともにこの七十年間少しも色褪せていない。

「一紅女に一度逢ひたし雪祭」

この句以後十年ばかり余命を保っていたが、実作としてはおそらくこれが最後であろう。一紅女は南国城よりやや年上で『ゆく春』創刊以来の句仲間で札幌に住んでいる。会ったこともない。私が一紅女の句を話題にした次の日に「これ、どうだい」と私に見せて、ほやつと笑う顔が実によかった。

（文・岡崎木石）



句集『土塊』

後夜の月よと帝の声きかゆ



赤間神宮境内に建つ句碑（下関市）

土居南国城 年譜

（提供・野村忠司）

初鼓和布刈垣山にひびくかも

枯カンナ火色かなしきまでに澄む

牡丹雪くぐり微塵の雪舞へる

春暁をこころこころと暮なきぬ

蝌蚪底をはなれぬ流れある底を

若葉の日脳溢血で我も死ぬか

後夜の月よと帝の声聞かゆ

檜櫟林の流れ秋立てり

土塊田土塊さむく茜消ゆ

——竜安寺石庭——

ふか潮の根雪にさやる幽けさか

（選・岡崎木石）

明治31（一八九八）年	一九歳	9月3日、愛媛県宇和島で生まれる。父土居松蔵、母ヨシの長男。本名光頼。
大正6（一九一七）年	二九歳	4月、東京荏原中学校編入。同じ編入者に北海道岩見沢から来た門田潔人（俳優月形龍之介）がいて生涯の友となる。
昭和2（一九二七）年	三一歳	『ゆく春』創刊に主軸として参加。室積徂春の門下。
昭和4（一九二九）年	三三歳	慶応義塾経済学科、山形高等学校文甲入学、京都帝大英文科卒業。卒論は「ガルズワージイに就いて」。卒業後、しばらく月形の芝居を手伝い、脚本などを書いた。
昭和10（一九三三）年	三九歳	9月、県立柳井中学英語教師として赴任。9月11日、加藤はなと結婚。
昭和20（一九四五）年	四七歳	3月、下関中学（現・下関西高等学校）に転任。昭和21年4月まで。
昭和24（一九四九）年	五一歳	その後、下関高等女学校（現・下関南高等学校）勤務。
昭和25（一九五〇）年	五二歳	長男和病死。
昭和33（一九五八）年	六〇歳	俳誌『寒虹』創刊（主宰者）。
昭和50（一九七五）年	七七歳	4月、下関南高等学校から再び下関西高等学校へ。昭和32年3月まで。
昭和55（一九八〇）年	八二歳	7月1日土居先生、還暦記念句集刊行会が句集『土塊』を発刊。
		10月18日、下関市赤間神宮境内に句碑建立。
		「後夜の月よと帝の声聞かゆ」
		句碑は他に柳井市大師山にある。
		「凭りかかる冬木の息かわが息か」
		11月18日、永眠。墓碑は下関市中央霊園。